

総論

満点	200点	目標得点	120点	試験時間	120分	偏差値	65
大問数	3						
【解答形式】	選択式	0/3問	記述式	0/3問	論述式	3/3問	
【問題難易度】	C	1/3問	B	2/3問	A	0/3問	
※問題難易度：C難問、B標準、A平易、を示す							

Topics

- 1：SFC入試における小論文の比重については総合政策学部のTopicsにあるので、それを参照のこと。
- 2：環境情報と総合政策とで、昨年度と形式が逆転している（資料文が与えられる形式と図表資料が与えられる形式）。09年環境情報の問題は、「子どものための番組」を作るというように、出題意図がわからなければただのアイデア提示問題に見えていたものが多かったが、今年度は、課題文を読解した上で、問1～3の設問に答えるオーソドックスなものであった。
- 3：問1は大図書館という大きいメリットを生むプロジェクトが生むであろう問題・課題を日本語という視点から導く問題発見型の論述である。問2は、大図書館成立の前提となっている電子テキストに関して、課題文や自分の知識から短所と長所を導く、問1同様の問題発見型の論述。問3は問1と問2で発見された課題を、いかに解決するかが求められる問題で、ここでは日本語・電子テキストというキーワードで解決策を論じる必要がある。課題文の内容はそれ自体難しくないが、設問自身は難易度が高いといえる。さらに、問1～3で合計1500字程度と多いのも受験生にとっては負担となっただろう。しかし、SFCが重要視している問題発見・解決のフレーム（現状とあるべき姿のギャップを問題と捉え、その原因を分析し、合理的な解決策を述べる枠組み）があれば、電子テキストや著作権に関する詳細な情報は知らなくても問題は解答できる。

こんな力が求められる！

- 1：環境情報学部を含めSFCは、経済学、政治学、情報科学など、など既存の学問分野では解決できない、もしくは捉えられない問題に対して、アプローチする姿勢を取っている。SFCで重要視されることは、問題発見・解決のフレームや論理性であり、問題への深い知識ではない。ゆえに、様々な事象に関して詳しく知っているかどうかよりも、論理的な原因追究と創造的な解決提案能力が求められる。そして創造的な解決提案能力には、環境情報学部ならではのITや様々な技術に関する知識が必要となってくるが、これらが特になくとも課題文にある内容で十分に対応は可能である。
- 2：課題文の読解に関しては、上記のように問題への深い知識が絶対に必要ではない分、資料を目的に応じて読み、必要な情報をインプットした後、課題との関係性を考えることが必要である。必ずしも課題文の中にある内容を使わないといけないわけではない。課題文にある内容以外でも、論理性がある内容であれば使ってもかまわない。
- 3：過去数年の環境情報学部に強く見られる傾向は、AO入試ほどではなくても、SFCのアドミッションポリシーを理解できているか、SFCで自分が研究する姿、状態をイメージできているか、SFCに入ってから主体的に学んでいくか、現場でどう対応するかが試されていることである（それは総合政策学部でも同様であるが、小論文では環境情報ほどあからさまではない）。したがって、そのようなことを常々意識しつつ、問題発見・解決型の小論文を過去問・他大学も含めて解くと良いだろう。

【問題 1】

予想配点	50/200 点	時間配分の目安	40/120 分
字数	500 字以内	出題形式	課題文型
設問形式	論述式		
出典	資料 A 水村美苗著 日本語が亡びるとき 筑摩書房 (2008 年 10 月)		
難易度	B ※問題難易度：C 難問、B 標準、A 平易、を示す。		

●注目すべきポイント：以下、項目ごとにお茶ゼミ論文科の予想採点基準を提示する。

問題発見力：資料 A-2、A-3 とともに、電子図書館が実現した時に日本語について問題になることが予想されている。A-2 によれば、電子図書館が実現しようとも、人々は自分の言葉で理解可能な範囲でしか利用しないであろう。ただし、英語の図書館だけは別格であり、A-3 によれば〈普遍語〉と化した英語により、〈国語〉としての日本語は、〈テキスト〉として書かれるべき〈学問の言葉〉ではなくなるだろう。電子的図書館が日本語に与えるこのような「悪影響」を、問題として読み取ることが必要となる。(10 点相当) A 評価 (10 点)、B 評価 (7 点)、C 評価 (5 点)。B 評価が標準。

構想力：設問には「A-2 と A-3 に基づいて」考察することが求められているが、上記の問題を論理的・具体的に展開してもよいし、筆者とは逆に「悪影響にはならない」という方向で論を組み立てる(例：西洋の人にもわかる〈学問の言葉〉で表現されてこなかった日本人の精神文化が、全世界の人に伝わる可能性を持つ)ことも可能だろう。(30 点相当) A 評価 (30 点)、B 評価 (20 点)、C 評価 (10 点)。B 評価が標準。

表現力：高校生として当然求められるべき正確な表現(表記も含む)ができている(10 点相当)。A 評価 (10 点)、B 評価 (7 点)、C 評価 (5 点)。B 評価が標準。

以下、二つの答案例を提示する。【答案例 1】、【答案例 2】共に合格者のものである。

【答案例 1】英語 60 問中 36 問正解 (60%)

(論旨のみ) スキャンニングの技術により電子的な図書館が可能になるとき、障壁となるのは言語である。そこで、普遍化した英語によりその障壁はなくなる。しかし、〈学問の言葉〉が英語という〈普遍語〉に一極化されることにより、世界中の知識を得るためには国語より英語が重視されることになる。特殊な分野を除いては、日本語は〈学問の言葉〉としての必要性が希薄化していく可能性があるのだ。また、叡智を求める人であればあるほど国語でテキストを書かなくなる。そのため作家も英語で作品を作ると、日本語と英語にある壁が障害になり、日本語で書いたときの作品より劣ったものになってしまうだろう。それは日本文学の衰えを意味する。つまり、表現としての日本語の重要性を見出さず、学問としての日本語を求めようとする限りは、英語の普遍化により、日本語は衰退してしまうのである。

【答案例 2】英語 60 問中 41 問正解 (68.3%)

電子的な図書館が普及すると、日本語の特徴や文化、言葉が失われることがありうると思う。

資料 A-2 は、〈大図書館〉が実現すると本は手に入っても言葉が読めないという問題が発生し、より多くのものが読めてより多くの人を読めるように、英語などの普遍語が重視されると述べる。そして、また過去の著作を翻訳することも進み、その翻訳の過程で誤解を生み、それを広げてしまう問題もあると述べる。私は『枕草子』を翻訳すると「あれがかわいい、あれが悪い」という翻訳でつまらない本だという誤解を生むことがありうると思ったことがある。たしかに翻訳が誤解を生みやすい本もある。すべての人が原文を読むことも難しい。誤解によって日本語の特徴が失われることがありうる。

資料 A-3 では、学術研究をする人などの間で普遍語が重視され、その結果学術的な言葉が多く失われると述べる。特に日本語で書かれたよい文学を生む可能性が減ることがありうると思える。私は英語の利便性は一度学問に入り込むとそこにとどまらずに、日常にまで入り込み、多くの日本語の言葉を奪っていくことがありうると思う。

【コメント】

両者ともに二つの資料を敷衍・展開する形であり、問題発見力、構想力、表現力いずれも、両者ともに B 評価 (7 点 + 20 点 + 7 点 = 計 34 点) 以上は確保できているはずである。

【問題 2】

予想配点	50/200 点	時間配分の目安	30/120 分
字数	300 字以内	出題形式	課題文型
設問形式	論述式		
出典	資料B ピーター・シリングスパーグ著 明星聖子 大久保譲 神埼正英訳 ガーデンベルグからグーグルへ 慶應義塾大学出版会 (2009 年 9 月)		
難易度	B ※問題難易度：C 難問、B 標準、A 平易、を示す		

●**注目すべきポイント**：以下、項目ごとにお茶ゼミ論文科の予想採点基準を提示する。

読解力：資料Bは、電子テキストの利便性に長所を見る一方、その信頼度は劣り、かつそれについて感心が向けられていないという短所を論じているので、本文中から必要な要素を正確に読解しなければならない(30点相当)。A評価(30点)、B評価(20点)、C評価(10点)。B評価が標準。

構成力：上記を読解した上で、設問要求に応じて、整理・再構成することが必要となる(10点相当)。A評価(10点)、B評価(7点)、C評価(5点)。B評価が標準。

表現力：高校生として当然求められるべき正確な表現(表記も含む)ができているか(10点相当)。A評価(10点)、B評価(7点)、C評価(5点) B評価が標準。

以下、二つの答案例を比較する。問1と同様、【答案例1】【答案例2】共に合格者のものである。

【答案例1】

電子テキストは検索可能な点、特定の情報の収集の早さ、必要箇所の「抜き出し」、保存が可能という点で長所を持つ。しかし、印刷した書物は、どんな場所でも容易に使用できるが、電子テキストは持ち運びは困難であり、実用的ではない。また、著作権に関する問題も電子テキストは持っている。電子テキストのさまざまな利点への満足が、印刷した書物にはあり、テキストが書かれ、読まれた文化的コンテキストを理解するための鍵である、テキストの正確さや起源に対する無関心を生み出しているという短所もあるのだ。

【答案例2】

電子テキストの長所は、多くの書物を吸収することができることと、それを瞬時に検索できることだ。またテキスト本文をコピーしたりいじることができることだ。短所は本よりも複雑な機器を使わなければいけないことだ。また誰でも編集者になれるため多くのテキストは出所や正確さが確認されないままである。それが人々に出所や正確さへ無関心にさせるという問題を引き起こしている。また学生が利用する場合、テキストの出所や正確さを確認しないまま学術研究に使い、誤った情報をつかうという問題を引き起こしている。

【コメント】

この問題はいわゆる読解問題であるが、長所に関しては、【答案例1】の方が正確な記述であるが、短所に関しては、【答案例2】の方が正確である。読解力、構成力、表現力いずれも、両者共にB評価(20点+7点+7点)の計34点である。

【問題 3】

予想配点	100/200 点	時間配分の目安	50/120 分
字数	700 字以内	出題形式	課題文型
難易度	C	設問形式	論述式
	※問題難易度：C 難問、B 標準、A 平易、を示す	出典	資料 A、B と同様

●**注目すべきポイント**：以下、項目ごとにお茶ゼミ論文科の予想採点基準を提示する。

読解力：資料 A、B を「総合して考察」することが求められているから、資料 A に述べられている電子図書館の利便性、学問の言葉としての英語一極化と日本語の衰退という問題、資料 B に述べられている電子テキストの不確実性への無関心を問題として読解しなければならない（20 点相当）。

A 評価（20 点）、B 評価（10 点）、C 評価（5 点）B 評価が標準。

課題解決策定力：大図書館の実現に伴い、「自分ならばこのようなプロジェクトにおいて利用する」という状況を設定する。そのうえで上記**読解力**で指摘された電子テキストの長所と問題に言及し、問題解決のフレーム（現状とあるべき姿のギャップを問題と捉え、その原因を分析し、合理的な解決策を述べる）を適用し、大学における研究という範囲で解決策を見出す力が必要となる。

A 評価（60 点）、B 評価（40 点）、C 評価（20 点）B 評価が標準。

表現力：高校生として当然求められるべき正確な表現（表記も含む）ができています（20 点相当）。

A 評価（20 点）、B 評価（10 点）、C 評価（5 点）B 評価が標準。

以下、二つの答案例を比較する。問 1・問 2 と同様、【答案例 1】【答案例 2】共に合格者のものである。

【答案例 1】

（論旨のみ）現在犯罪が増えている。それにもかかわらず事件の被害者・加害者の心のケア、社会復帰はなされていない。私は主に加害者に焦点をあてた社会復帰を、社会面、精神面、デザイン面から試みたいと考える。たとえば刑務所で聖書の普及をするとき、印刷した書物は電子テキストでは感じられない「重み」があることを私たちに感じさせてくれる。つまり、電子テキストは私たちが気づかなかった印刷した書物の重要性を教えてくれるかもしれない。

加害者に関連する「死刑」について考える際、海外における「死刑」を考えることも重要である。日本語訳でなく、英語そのままのニュアンスで考えられる。最新の情報も必要であり、電子テキストは瞬時に情報が入ってくる。書物は出版されるまで時間がかかる。以上のことから考えると、電子テキストはそれ自体が便利であると同時に、印刷した書物の重要性を私たちに気づかせてくれると考える。

【答案例 2】

電子的な図書館はこれからの将来に不可欠な図書館だと考える。なぜなら世界は今ますますつながっているからだ。経済でも地球温暖化問題でも、世界が相互に影響を与え合っているから研究には世界中の情報を知ることが求められているからだ。

だから私は電子的な図書館を積極的に利用していきたいと考える。しかし、それと同時に本を並べた普通の図書館も併用していきたいと思う。

資料 B では電子図書館の、資料のあいまいさが問題であることがわかるし、資料 A では日本語を読まなくなる問題があることがわかるからだ。たとえば漠然とした問題には電子的な図書を利用する。そして図書館では電子的な図書館で読んだ中で気になった情報に関する本を探して利用する。電子的な図書館は検索機能があるし、あちらこちら読むことができる。本は重い、正確さが保証されているからだ。また本を利用すると日本語に触れることもできると思うからだ。そして文献をじっくり考えたいと思ったときには電子テキストを利用する。線を引いたり、テキストを汚したりしながら考えられることは便利だからである。二つの図書館を上手に利用していきたいと思う。

【コメント】

【答案例 1】は、研究テーマ自体は面白いが、第一段落の内容は、電子図書館とは直接に関係ないものになっている。ただ、おそらく資料から読解したであろう言葉のニュアンスの問題を通して、印刷した書物の重要性を語るという論旨には、独自性が認められるだろう。【答案例 2】は、独自の研究テーマこそないが、資料の問題点も十分に理解しているし、電子図書館と従来の図書館の併用という立場はきわめて明瞭である。両答案を採点すると、**読解力、課題解決策定力、表現力の順に**、【答案例 1】は、B⁻（8 点）B（40 点）B（10 点）、計 58 点、【答案例 2】は、B⁺（15 点）、B⁺（45 点）、B（10 点）、計 70 点。問 1～問 3 を合計すると、【答案例 1】は 126 点、【答案例 2】は 138 点となる。

Benesse® お茶の水ゼミナール

補足：この問題を解くうえでは、情報社会の現状として、ポスト「ユビキタス社会（いつでもどこでも情報が手に入る社会）」としての「アンビエント情報社会（いつでもどこでも+あなたにだけ。ランダムに与えるだけではなく、カスタマイズされた情報）」の到来が背景としてあることを踏まえておけるとよい。